

在日ブラジル人の日本語における音声変異と変化

— 首都圏における多文化日本語変種に関する探索的研究 —

松本和子(東京大学) 奥村晶子(神田外語大学)

1. はじめに

本稿は、少子化と移民の増加を抱え、移民大国に変貌しつつある日本における日本語にどのような変異と変化が生じ得るか、その変化の方向性や要因を調査考察するものである。異なる国から移住してきた複数の民族が肩を寄せ合って集住している首都圏の周辺部にあるコミュニティを調査地とし、移民先進国であるイギリスやカナダで注目を集めている「多文化ロンドン英語」(Cheshire et al., 2011), 「多文化トロント英語」(Denis et al., 2023) に当たるような現象が、今後、首都圏東京でも観察し得るかどうかを議論することを目指している。

国外の先行研究では移民コミュニティにおける「民族変異 (ethnolectal variation)」には、相反する2つの傾向が指摘されている。一方では特定の移民集団の帰属意識を示すような独特な話し方をする (Cheshire et al., 2011) こと、他方では地元住民の話し方を採用し、さらにホスト社会で進行中の変化をリードする役割を担っている (Grama et al., 2020) という。本研究はこうした傾向が首都圏の周辺部にある移民コミュニティにおいても当てはまるかどうかを探るため、茨城県常総市の移民コミュニティで各世代から収集した語彙発話の音声変異を、①移民一世の第一言語あるいは二世以降にとっての継承語からの言語転移という観点から考察するとともに、②ホスト社会の地域方言で進行している言語変化への参加度合いを考察することで、首都圏の周辺部で形成された移民社会で芽生えつつある言語変異に関する議論の発展に寄与することを目指す。

2. 常総市の移民コミュニティ

本研究の調査地である茨城県常総市はブラジル人やペルー人、フィリピン人等の外国人居住者が人口の7.7%を占める地域で、その多くが食品工場で就労している。この中でもブラジル人が最多で、日系人として日本国籍を取得した人も多い。ブラジル人を顧客とするスーパー、レストラン、美容院、スポーツジム、ブラジル人学校等が揃い、ブラジルポルトガル語(以下、BP)だけで生活を営める環境が整備されている。一方、地元教会ではBP/スペイン語/英語で定期的にミサが行われ、ペルー/ブラジルスーパーやフィリピン/ブラジルストアもあり、多様な背景を持つ移民が共生している様子も伺える。

当該地で行った予備調査の結果、①BPは二世へも継承されていること、②日本語能力に関しては、日本の学校へ通う二世とブラジル人学校へ通う二世の間には有意な差があることが判明している(松本・奥村 2019: 251)。本研究ではBPを第一言語とし日本語を第二言語とする一世とブラジル人学校あるいは日本の学校に通う(あるいは卒業した)二世の日本語の特徴および変化の方向性と要因を探っていく。また調査地である茨城県は北関東の中でも「東北方言」地域として古くから知られている(宮島 1961)が、公共の交通機関が改善されたことから都内への通勤も可能となり、近年は現代的な東京の日本語変種へ移行傾向にある地域である。そのため、移民が伝統的な茨城方言に含まれる東北方言の特徴にどの程度適応しているか、あるいはどの程度東京の日本語変種へ移行しているかを考察する。

3. 調査の概要

本研究では茨城県常総市の移民コミュニティを調査地とし、多数派を占めるブラジル人移民一世22名と二世41名(ペルーにもルーツを持つ4名も含む、ブラジル人学校15名、日本の学校26名)計63名より収集した語彙発話の音声変異を話者情報と言語環境に基づいて定性的・定量的に分析する。ブラジル人の第一言語であるBPからの音声転移の可能性のある3つの言語変項(①ラ行子音の巻き舌化(以下、巻き舌化、/r/ [30語 N=1,890]), ②促音の脱落(/Q/ [6語 N=378]), ③長母音の短母音化(以下、短母音化、/R/ [20語 N=1,260])とホスト社会である常総市の伝統的な方言的特徴とされる3つの言語変項(④⑤カ/タ行子音の語中有声化(以下、語中有声化、/k/ [16語 N=1,008]と/t, ts/ [8語 N=504]), ⑥ガ行子音の語中鼻音化(以下、語中鼻音化、/g/ [9語 N=144])を分析対象とし、合計84語(一語に複数の分析箇所あり)5,292トークンを分析する。言語外要因に関しては、①世代、②性、③学校、④居住歴、⑤職歴、⑥年齢、⑦来日時年齢、⑧日本滞在期間、⑨⑩日

本ブラジル社会のイベント参加頻度, ⑪⑫日本語/ポルトガル語能力を, 言語内要因に関しては, 巻き舌化と促音の脱落, 短母音化には①当該音素/音節の位置, ②先行音, ③後続音, ④語彙層, ⑤BP 話者のアクセント付与見込を, 短母音化にはさらに⑥日本語のアクセント核の有無も考慮する. 語中有声化には①先行音, ②後続音, ③先行拍における長音の有無, 語中鼻音化には①先行音, ②後続音, ③語彙層, ④先行拍における鼻音の有無を考慮する. 世代・年齢における差を「見かけ上の時間」(Bailey 2002) と捉え, 変化の進む方向を考察する. 言語外要因の統計分析にはマン・ホイットニー-U 検定 (以下 MWU 検定) とクラスカル・ウォリス検定 (以下 KW 検定) を, 言語内要因の検証にはロジスティック回帰を用いる.

4. 分析

4.1 変異形の分布

【表1】～【表6】は「言語変項 (linguistic variable)」ごとに全話者の「変異形 (variant)」の分布を示している. まずラ行子音【表1】は語中では日本語の標準的発音[r]が99%近くを占めるが, 語頭では巻き舌[r̄] (例: れんこん[reŋkon]) が4割弱観察された. さらにBPのStrong-R (語頭<r>と語中<rr>) で最も多く使われる[h] (松本・奥村 2019) がブラジル人学校に通う二世で採用された事例 (例: 廊下[hoka]) も5件見られた. 促音の脱落【表2】も4割弱 (例: あっさり[asari]), 短母音化【表3】は3割弱 (例: ジーンズ[djinzu]) 観察された. 語中鼻音化【表4】は僅か3件だけ (りんご[rinjo], 図画[zuŋa]) 見られ, 語中有声化はカ行で30件 (例: 地域[gi:gi]) 【表5】, タ行で4件 (例: かたち[kadaŋi]) 【表6】と, いずれも少数派である. 以上のことから, BPからの音声転移は顕著に見られるが, 地元の伝統的な地域方言への適応は限定的だと言えそうである. こうした揺れに何らかの規則性があるか, どのような要因が関わるかを定量的・定性的に探っていく.

【表1】ラ行子音/r/の巻き舌化の分布 出現数 (出現率)

	[r̄]	[r]	[h]	その他	合計
語頭	192 (61.0%)	119 (37.8%)	3 (1.0%)	1 (0.3%)	315 (100%)
語中	1,557 (98.9%)	7 (0.4%)	2 (0.1%)	9 (0.6%)	1,575 (100%)

【表2】促音/Qの脱落の分布 出現数 (出現率)

	促音保持	促音脱落	その他	合計
	223 (59.0%)	150 (39.7%)	5 (1.3%)	378 (100%)

【表3】長母音/R/の短母音化の分布 出現数 (出現率)

	非短母音	短母音	その他	合計
	911 (72.3%)	340 (27.0%)	9 (0.7%)	1,260 (100%)

【表4】語中ガ行子音/g/の鼻音化の分布 出現数 (出現率)

	[g]	[ŋ]	[k]	その他	合計
	213 (84.5%)	3 (1.2%)	30 (11.9%)	6 (2.4%)	252 (100%)

【表5】語中カ行子音/k/の有声化の分布 出現数 (出現率)

	[k]	[g]	[kk]	その他	合計
	958 (95.0%)	30 (3.0%)	12 (1.2%)	8 (0.8%)	1,008 (100%)

【表6】語中タ行子音/t, ts/の有声化の分布 出現数 (出現率)

	t				合計
	[t]	[d]	[tt]	その他	
t	294 (93.3%)	1 (0.3%)	20 (6.3%)	315 (100%)	315 (100%)
	ts				合計
	[ts]	[dz]	[tts]	その他	
ts	179 (94.7%)	3 (1.6%)	2 (1.1%)	5 (2.6%)	189 (100%)

4.2 巻き舌化・促音の脱落・短母音化の要因

本節ではBPからの音声転移と考えられる巻き舌化・促音の脱落・短母音化を促す要因について検討する. 言語外要因から始める. MWU/KW 検定の結果, いずれにおいても①世代, ②年齢 (録音時), ③来日時年齢, ④二世の学校, ⑤日本語能力に有意差が認められた¹. 具体的には, ブラジル人学校へ通う二世や日本語能力の相対的に低い話者の方が, 日本の学校へ通う二世や日本語能力の高い話者よりも巻き舌を使い, 促音を脱落させ, /R/を短母音化させる傾向が示された. また一世や高齢話者の方が二世や若年層よりも, こうした傾向が見られることから, これらのBPからの音声転移は世代を重ねると/年齢が下がるほど, 減少傾向にあることが示された. 来日時年齢に関しては, 6歳未満で来日した話者とそれ以降に来日した話者との間で促音の脱落率と/R/の短母音化率において有意差が見られた. この結果は日本語特有の促音や長音は幼少期を過ぎてから習得することが困難である傾向を示している. ラ行子音に関しては, 17歳未満で来日した話者とそれ以降に来日した話者との間で巻き舌化率に有意差が示された. BPのR音は多様な変異形を持ち (松本・奥村 2019: 255), 語頭の<r>はStrong-Rとして[h]あるいは[r̄]で発音され, 語中の母音間の<rr>はweak-rとして[r]で発音される傾向にある. 17歳以上で来日した話者は, 日本語とBPで不一致が起こる語頭位置の/r/を[r̄]で発音することが困難である可能性を示している.

次に言語内要因についてロジスティック回帰 (条件付き変数減少法) を用いて検証する. 巻き舌化に関しては(1)当該子音の位置のみがモデル【表7】として採用され (Omnibus chi-square = 418.373, $p < .001$), 語頭 (37.8%, 例: らくだ) の方が語

¹ 巻き舌化 ①世代: $U = 254.500$, $p = .003$, ②年齢: $\chi^2 = 17.077$, $p < .001$, ③来日時年齢: $\chi^2 = 8.481$, $p = .037$, ④二世の学校: $U = 42.000$, $p < .001$, ⑤日本語能力: $\chi^2 = 26.751$, $p < .001$, 促音の脱落 ①世代: $U = 290.500$, $p = .019$, ②年齢: $\chi^2 = 8.484$, $p = .037$, ③来日時年齢: $\chi^2 = 17.835$, $p < .001$, ④二世の学校: $U = 75.500$, $p < .001$, ⑤日本語能力: $\chi^2 = 12.898$, $p = .005$, 短母音化 ①世代: $U = 202.000$, $p < .001$, ②年齢: $\chi^2 = 13.103$, $p = .004$, ③来日時年齢: $\chi^2 = 16.704$, $p < .001$, ④二世の学校: $U = 88.500$, $p = .004$, ⑤日本語能力: $\chi^2 = 8.559$, $p = .036$.

中 (0.4%, 例: 室) よりも巻き舌化が見られる傾向が示された。先の通り, 語中環境は母音間で尚且つシングル<α>であり, 日本語でも BP でも [ɹ] で発音されるという点で一致していることから巻き舌化率が低く, 一方, 語頭は日本語では [ɹ] のままであっても, BP では Strong-R として [h] あるいは [ɹ] で発音される環境であるため巻き舌化が出現しやすいと考えられる。つまり BP の R 音の体系が日本語へ持ち込まれた結果と言えよう。

促音の脱落に関しては(1)BP 話者のアクセント付与見込のみがモデル【表 8】として採用され (Omnibus chi-square=19.970, $p<.001$), アクセントが付与される語 (65.1%, 例: 突進) が付与されない語 (34.6%, 例: 作家) よりも促音が脱落する傾向が示された。なぜ BP 話者がアクセントを付与すると促音が脱落しやすいのか。そもそも促音と長音はモーラ言語ならではの特殊拍であり, 音節言語である BP の話者にとって習得しにくいものである。長音に関しては, 音節言語ではアクセントが付与される音節で母音が長くなる傾向があるという (例えば, 佐藤 1992 は同じく音節言語であるロシア語のこうした傾向を指摘している)。促音を含む音節にアクセントが付与されると, 音節内の母音が長くなり, さらに促音まで入り込み難くなることが推測される。また, 語彙ごとに見てみると, 「突進」における促音の脱落率が突出して高い。促音の脱落の調査語の中で「突進」は唯一撥音を含む語である点に注目したい。これは促音を含む箇所以外に撥音・長音・二重母音等が含まれる語は促音が脱落しやすいとする指摘 (杉本 2007) に合致するものである。

短母音化に関しては(1)(2)当該音節の位置, (3)(4)先行子音, (5)(6)語彙層, (7)日本語アクセント核の有無という 4 つの要因を含むモデル【表 9】が採用された (Omnibus chi-square=169.475, $p<.001$)。ただしこのモデルにおいて有意な貢献が見られたのは当該音節の位置 (語末), 語彙層 (外来語), 日本語アクセント核 (なし) のみであり, 語頭 (28.7%, 例: 通路) の方が語末 (21.7%, 例: 移動) よりも, 外来語 (43.2%, 例: エース) の方が和語 (16.4%, 例: おじいさん) よりも, アクセント核がある (34.6%, 例: 地域) 方がない (12.9%, 例: 数字) よりも短母音化しやすい傾向が示された。前川 (2002) では大規模自発音声データベースを用い短母音化の要因を検討しており, その結果から, ①片仮名語における短母音化率は漢字語よりも高く, ②語頭に長母音が位置する場合に短母音化率が低く, ③無核の長母音の短母音化率が有核長母音よりも高いことが予測される。従って本研究の話者の結果は, 語彙層については日本語 (共通語) と一致する (外来語が短母音化しやすい) が, 語中の位置とアクセント核に関しては異なる結果であると言える。その理由は調査語の偏りによるものと考えられる。最も短母音化が起りやすい外来語 9 語は全て語頭に長母音が位置していたことから, 本来ならば最も短母音化が起り難いとされる語頭において短母音化が集中したのではないかと考える。また長母音の調査語 21 語中, 長母音のある音節が有核なのは 13 語, そのうち 9 語 (69%) を外来語が占めたことが有核長母音における短母音化率が高まった原因と考えられる。調査語の改善を今後の課題とした。

以上の結果から, ブラジル人学校へ通う二世や日本語能力の低い話者の方が日本の学校へ通う二世や日本語能力の高い話者よりも BP からの音声転移が見られる傾向はあるものの, こうした音声転移は学習者のランダムな間違いとして生じるのではなく, 語中の位置や BP 話者のアクセント付与見込, 語彙層などにより説明され得る, 一定の規則性を持つ変種であることが示唆された。

4.3 語中有声化・語中鼻音化の要因

本節ではホスト社会の地域方言の特徴である語中有声化・語中鼻音化を促す要因と東京で使用されている標準形 (語中 /k/ の [k], 語中 /t, ts/ の [t, ts]) を促す要因を検討する。MWU/KW 検定を用いて言語外要因を解析したところ, 有意な要因は検出されなかった。しかし 5% 水準には満たないが, 語中鼻音化とタ行の標準形 [ɲ] では年齢の有意確率はそれぞれ $p = .051$, $p = .052$ として決して大きいものではなかった。鼻音化に関しては 12 歳以下と 60 歳以上の方が, 中学生から働き世代よりも [ɲ] の使用率が高まる傾向が, 標準形 [ɲ] に関しては逆に 12 歳以下と 60 歳以上の方が, 中学生から働き世代よりも [ɲ] の使用率が低くなる傾向が示された。つまり典型的な U 字型ベル型カーブを描いており, 青年期と壮年期では東京で使われている標準的な変異形 [g, ɲ] が好まれるが, 少年期と老年期では地元の方言形 [ŋ, d, dz] も僅かながら使用している様子が垣間見られた。従ってこの年齢要因は通時的な変化が移民社会で進行していることを示すというよりは, いわゆる「個人話者の成長とともに生じる変化 (age-grading)」の可能性が高いと考える。人

【表 7】 /r/ の巻き舌化に関するロジスティック回帰の結果

言語内要因 (レベル)	係数	Wald 検定	有意確率
(1) 当該音素の位置 (語頭)	4.913	153.721	<.001
定数	-5.412	204.090	<.001

【表 8】 /Q/ の脱落に関するロジスティック回帰の結果

言語内要因 (レベル)	係数	Wald 検定	有意確率
(1) BP 話者のアクセント付与 (なし)	-1.259	18.900	<.001
定数	.623	5.549	.018

【表 9】 /R/ の短母音化に関するロジスティック回帰の結果

言語内要因 (レベル)	係数	Wald 検定	有意確率
(1) 当該音節の位置 (語中)	-.227	.201	.654
(2) 当該音節の位置 (語末)	1.531	22.707	<.001
(3) 先行子音 (軟口蓋音)	-.468	2.032	.154
(4) 先行子音 (その他)	.000	.000	.999
(5) 語彙層 (漢語)	-.169	.288	.591
(6) 語彙層 (外来語)	1.217	10.119	.001
(7) 日本語アクセント核 (なし)	-1.126	10.769	.001
定数	-1.441	9.847	.002

は年を重ねるにつれ、各年代にふさわしい言葉遣い（幼児期・思春期・社会人・老年期特有の話し方）を身に付ける。そのため個人の言語使用は生涯を通じて変わるものの、これは毎世代繰り返されるパターンであり、社会全体に通時的な言語変化をもたらすものではない。従って標準形への言語変化が進行しているとは言い難いと考える。

次に言語内要因についてロジスティック回帰（条件付き変数減少法）を用いて検証する。語中/k/の有声化に関しては、(1)先行音、(2)後続音という2つの要因を含むモデル【表10】が採用され（Omnibus chi-square = 18.225, p < .001）、いずれも有意な貢献が見られた。先行音が狭母音（3.8%、例：好き）の方が非狭母音（0.4%、例：坂）よりも、また後続母音が非狭母音（4.0%、例：図工）の方が狭母音（2.0%、例：積み木）よりも有声化する傾向が示された。これは東北方言で言われる狭母音に後続する環境では母音無声化の影響から語中有声化が起きない（大橋 2002）という傾向に反するように見えるかもしれない。しかし語中鼻音化に関わる調査語の発話では、先行する母音の無声化は起こらなかった。このため先行母音が狭母音であっても語中有声化が起り得たと考える。語彙ごとに見てみると、語中有声化率が突出して高かった語は「図工」であった。この影響で先行母音（狭母音）と後続母音（非狭母音）が予測因子になった可能性が考えられる。

【表10】語中/k/の有声化に関するロジスティック回帰の結果

言語内要因（レベル）	係数	Wald 検定	有意確率
(1) 先行母音（狭母音）	2.609	6.485	.011
(2) 後続母音（狭母音）	-1.034	6.827	.009
定数	-5.349	28.439	<.001

5. まとめと今後の課題

本稿は、首都圏周辺部の移民コミュニティで使われている日本語の言語的特徴を理解するため、移民言語からの言語転移が観察されるか、ホスト社会の地域方言に適応しているか、東京の変異形に移行しているか、それらを促す要因は何か等を検討した。移民言語の影響に関しては、一世ではBPからの音声転移と見られる現象が散見されたものの、二世では減少傾向にあることが示された。従って、常総市の移民コミュニティで使われている日本語変種に関しては、現時点では特定の移民集団の帰属意識を示すような独特な話し方をする傾向が強まっているとは言い難い。一方、ホスト社会の地域方言への適応に関しては、伝統的な方言形の使用は限定的であり、東京で使われている標準形が圧倒的多数派を占めることが示された。しかし方言形の使用はage-grading（上記参照）を示唆する年齢分布であることから、常総市の移民コミュニティの日本語変種が東京の変異形へ収束し、変化が完成しつつあると解釈するよりは、普通の会話では方言形を使っても青年期特有の都会への憧れや壮年期で繰り返し報告されている標準形使用への社会的圧力などの理由により、東京の変異形を敢えて選択した可能性を指摘した。語彙リストの読み上げタスクは発音に対する話者の意識的コントロールが効きやすいものであるため、今後は自然談話などにより話者の意識が向かないデータの収集を検討したい。ペルーにルーツを持つ話者においては、促音の脱落と短母音化に関しては多数派のブラジル人と同様の傾向が観察されたが、ラ行子音に関しては今後より精緻な分析を進め、ペルース페인語とBPからの音声転移の違いを明らかにしていきたいと考える。

参考文献

- Bailey, G. (2002). Real and apparent time. In Chambers, J. K. et al. (eds.) *The handbook of language variation and change*, 312–332. Oxford: Blackwell.
- Cheshire, J., Kerswill, P., Fox, S., & Torgersen, E. (2011). Contact, the feature pool and the speech community: The emergence of Multicultural London English. *Journal of Sociolinguistics* 15(2), 151–196.
- Denis, D., Elango, V., Kamal, N. S. N., Prashar, S., & Velasco, M. (2023). Exploring the vowel space of Multicultural Toronto English. *Journal of English Linguistics* 51(1), 30–65.
- Grama, J., Travis, C. E. & Gonzalez, S. (2020). Ethnolectal and community change ov(er) time: Word-final (er) in Australian English. *Australian Journal of Linguistics* 40(3), 346–368.
- 前川喜久雄 (2002). 話し言葉における長母音の短呼—『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声変異の分析— 国語学会 2002 年度春季大会要旨集, 43–50.
- 松本和子・奥村晶子 (2019). 在日ブラジル人移民のコイネー形成—方言接触, 創始者効果, フィーチャープールの検証— 社会言語科学, 22(1), 249–262.
- 宮島達夫 (1961). 方言の実態と共通語化の問題点—福島・茨城・栃木— 東条操 (監) 方言学講座第二巻東部方言 東京堂 pp. 236–263.
- 大橋純一 (2002). 東北方言音声の研究 おうふう
- 佐藤純一 (1992). ロシア語 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編著) 言語学大辞典 4 三省堂 pp. 1032–1044.
- 杉本妙子 (2007). ベトナム語圏日本語学習者の発音に関わる誤用について III—促音と撥音における誤用の比較と考察— 人文コミュニケーション学科論集, 2, 149–164.